

## 教師力向上支援事業派遣研修報告書

- 1 所属・職・氏名 富山市立八尾小学校・教諭・中島 心
- 2 研修期間 平成30年9月17日(月)～9月24日(月) 8日間
- 3 調査研究課題 アメリカ西海岸における教育、芸術、歴史、文化や社会事情等の調査研究
- 4 研修機関等 シアトル : 在シアトル総領事館  
ビーコンヒルインターナショナル小学校  
ジョンスタンフォードインターナショナル小学校  
サンフランシスコ: メンロー大学  
スタンフォード大学  
サンリアンドロ高校  
サンフランシスコ市役所

### 5 研修の概要

#### 【アメリカの文化や社会事情】

アメリカの教育事情視察が今回の研修の目的だったが、教育はその国々の歴史や文化、社会事情によるところが極めて大きいことを改めて感じた。一週間の研修の中で、アメリカの文化や考え方について以下のようなことを考えた。

#### 〔自由と責任〕

アメリカは自由や個性を大切にしたい国であるが、あくまで責任をもつのは自分である。一例ではあるが、「就きたい仕事に就けないのは、自分の努力不足」「物を盗られるのは盗られるような危険なところに行った人が悪い」といった考えが根底にある。自由と責任とは、表裏一体なのだと感じた。

#### 〔コミュニケーション〕

お店やエレベーター、街中等、至る所で挨拶や会話が多く交わされることに温かい気持ちになった。また、途中立ち寄ったスターバックスコーヒー1号店では、コーヒーを渡す際に番号札ではなく、名前と呼ばれていた。多民族・多人種・多言語で考え方も多様なアメリカでは、より多くより深くコミュニケーションをとることで相手と意思疎通を図っているのだと感じた。日本でも、以前よりも、子供も保護者も多様な考えをもつようになってきている。だからこそ、これからは日々の学習や体験の中で、コミュニケーションの方法を学んだり、相手とつながりたいという気持ちを高めたりして、コミュニケーションの土台を育てていく必要性を感じた。

#### 〔自己肯定感〕

子供たちも大人たちも自己肯定感がとても高い。学校の先生や児童・生徒に、それぞれの課題について聞くと、「パーフェクト!」という答えが多かった。自分の課題を捉え、より成長していこうとするのが日本人のよさであるが、自己肯定感を高めることは、自分を大切な存在であると捉え、物事に取り組む意欲や幸福度を高めてくれる。自分もこれまで以上に子供の成長や挑戦を大いに認め、子供たちの自己肯定感を高めていきたい。

#### 〔格差社会〕

今回訪問したシアトルやサンフランシスコはここ10年ほどで物価が大きく上昇し、給料の高い職業に就いていなければ、生活が大変苦しいという話を現地の方から聞いた。特にサンフランシスコではホームレスの人が本当に多く見られた。また、所得の高い人が集まる地域とそうでない地域があり、学校への寄付金等の関係もあり、学校教育にも差が生じている。そのスパイラルが格差社会を助長している。

#### 【アメリカの教育事情】

#### 〔シアトル総領事館〕〔サンフランシスコ市役所〕

シアトル総領事館、サンフランシスコ市役所にて、アメリカの教育事情について伺った。アメリカは州や学区によって教育方針を決めている。シアトルのあるワシントン州とサンフランシスコのあるカリフォルニア州は、日本の年長児から小学5年生までの6年間は小学校、小学6年生から中学2年生までの3年間は中学校、中学3年生から高校3年生までの4年間は高校となっており、小学校1年生から高校3年生までの12年間は義務教育である。ワシントン州では日本の小学校3年生から中学校2年生で、年に1度統一学力テストが行われ、飛び級や留年もある。学区を司る教育長は選挙によって決まり、校長は自らが応募し、教育長と教育委員が選考する。また、教員は校長が面接して選考する。よって、校長に大きな裁量があり、校長が変わると学校の方針が大きく変わるようである。



【シアトル総領事館】

シアトル総領事館の山田洋一郎総領事からは、日本の学校教育の課題として、一人一人の個性にもっと目を向けるべきだという話があった。マイクロソフト社のビルゲイツ氏やアップル社のスティーヴ・ジョブズ氏はADHDという個性を生かし、ビジネスに発展させてきた。一方、サンフランシスコ教育委員の村瀬エミリー氏からは、日本の教育のよさとして、制服と給食（皆が一緒なので貧富の差が分からない）、自分たちで学校を清掃すること、高いお金を払わなくても大学に入学できることを話された。

お二人の話や今回の視察先での研修から、アメリカにも日本の教育にもそれぞれのよさや課題があることを実感した。私はこれまで、子供たちに周りと合わせることやある程度のレベルまで全員の成績を引き上げることを意識して指導していたと思う。今回の話を聞き、日本人がもっている優しさや規律正しさ、読み・書き・計算等の高い基礎的能力を大切にしながら、アメリカのできる子供をより伸ばしていく教育を組み合わせていくような教育を目指していきたいと考えた。

〔ビーコンヒルインターナショナル小学校〕

シアトルでは、ビーコンインターナショナル小学校とジョンスタンフォード小学校の2校を視察した。ビーコンインターナショナル小学校は、アジア太平洋系とヒスパニック系が35%ずつ、白人13%、アフリカ系アメリカ人が10%と多言語・多民族が混在する小学校である。そのため、英語を話せない子供も多く、英語やマンダリン語（北京語）、スペイン語等、様々な言語で学習を進めていた。また、保護者ボランティアも多く、K5年長児）の学級では、担任が1名、副担任が1名、保護者ボランティア2名で学習指導を行っていた。言語の習得を大切にしているため、読書や筆記の学習に取り組んでいる学級が多かった。また、同じ学級でも、たくさんのプリントが用意されており、個々の学習状況に応じた内容を学んでいた。

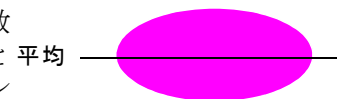
〔ジョンスタンフォード小学校〕

ジョンスタンフォード小学校は、バイリンガル児童への支援体制が充実している学校で、校長先生に「一番大切にしていることは？」と尋ねると、即座に「2か国語を話せるようにすることです」という答えが返ってきた。学習方法もユニークで、午前中は英語で学習をしていたが、午後は全て日本語（またはスペイン語）で学習を行うイマージョン教育というプログラムを行っていた。教室掲示も全て日本語となっており、子供たちは日本に来たような感覚で算数や図工の学習に取り組んでいた。また、各教室に副担任がいて、ノートやプリントのチェック、学習の途中で泣き始めた児童への対応等をする姿が見られた。子供たちに将来の夢を聞くと、アメリカンフットボールやバスケットボール、野球といった人気のプロスポーツ選手の他に、ユーチューバーやエンジニアと答える子供も多かった。どの子供たちも多少はにかみながらも素直で明るく答える姿を見せてくれた。

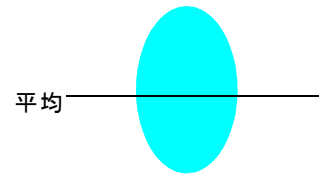
### 【研修を振り返って】

研修を通して、強く感じたことは教育という仕事に携わる誇りである。グローバル社会において未来の日本を支える子供たちを育てるといのは、資源の少ない我が国にとって何よりも大切なことである。経済同友会の皆様もきっと同じ思いで今回のような視察を経験させてくださったのではないかと考える。今回の研修中に心に残った言葉の一つに「子供は商品、消費者は社会」という言葉がある。夢や好奇心をもち、自分で考え、自立できる子供。そして相手の話を聴き、自分の思いを伝え、人と仲よく共生できる子供。また、日本やふるさとの富山に誇りをもつ子供。そんな子供たちを一人でも多く育て、これからの社会に送り出していきたいと思った。そのためには、まず自分自身がよく考え、日々精進していくことが大切である。そして、これからも教職員や保護者、地域の方と密にコミュニケーションをとりながら教育という仕事に誇りをもって携わってきたい。

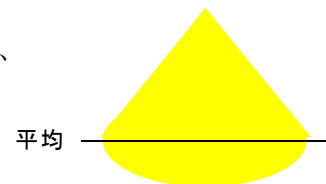
今回の研修は、これまで自分がもっていた常識や価値観、教育観が大きく変わる大変貴重なものとなった。このような貴重な機会を与えてくださった富山県教育委員会の皆様、富山経済同友会の皆様に深く感謝申し上げたい。



【日本の成績分布】



【アメリカの成績分布】



【自分が目指したい分布】



【保護者ボランティアによる指導】



【教室に掲示された日本語】